

里親制度を通じて就農された皆さん

東筑摩郡波田町 土肥寛幸さん

土肥寛幸さんは、長野県で農業を始めたいとの思いから、住み慣れた東京を離れて平成17年4月から波田町でスイカ栽培を主体とした農業経営を行っています。

就農にあたっては、県の就農コーディネーターの紹介により、県農業大学校で9ヶ月間の里親前基礎研修を受講後、県の新規就農里親制度を活用し、波田町でスイカ経営をしている百瀬央士さんのもとで1年3ヶ月間の里親研修を行い、技術やノウハウを習得し就農しました。

現在の経営は、奥様と2人でスイカを約1.4ha、その他の野菜を0.2ha栽培しています。栽培面でのモットーは、土肥さんの名前のごとく「土を肥やして美味しいスイカ作り」で、定期的な土壌診断に基づく有機肥料の施用と除草剤を使わない栽培に取り組んでいます。

現在、研修同期の新規就農者を中心に「新規就農者ふ組」を結成。最先端の農業技術勉強会の自主開催を中心に、「新規就農者による新規就農者の支援」として、県内外や作物、農法を問わず、より多くの新規就農者を巻き込み、励ましあいながらお互いの自立と継続に貢献するべく、活動をしています。



上伊那郡宮田村 杉山栄司さん

リンゴ栽培農家の杉山栄司さんは、平成16年12月に佐久市「チクマ農園」での里親研修を終了し、宮田村へと引っ越しました。翌17年4月からはJA上伊那のインターン研修生となり、村内のリンゴ園で栽培技術の習得に励みました。現在は、「ふじ」と「つがる」を中心に2.0haの果樹経営者となり、おいしいリンゴの提供を目標に取り組んでいます。



里親研修については迷い・不安もありましたが、長野県農業大学校での基礎研修中に何度もチクマ農園を訪れ、里親となる小林吉彦さんのリンゴを食べたことで、「この人の下でリンゴづくりを学びたい」と決心したとのこと。

就農の場所も当初は佐久地域を考えていましたが、小林さんの後押しもあって、遠く離れた宮田村で就農することとなりました。杉山さんは「研修は苦しいこともあったが、そのお陰で今があります」「師匠のリンゴの味を土台に、自分のリンゴづくり・味を追求していきたい」と語られました。

リンゴわい化園の老木化、栽培者の減少等産地が抱える問題が多い中で、リンゴ栽培に意欲を燃やす杉山さんは地域農業の担い手として期待されています。